

## 終章 地域史の課題と可能性

### 1 成果と課題

本書は東北地方南部太平洋岸の地域を舞台に、武士団の動向を通史的に描くことを目的とした。考古資料・文献史料を中心に金石文、城館、条里制遺構などを積極的に活用した。資料の限られている地域史研究は、総合的(学際的)な視角が不可欠であり、こうした手法によっておおまかな見通しを示すことができたと考える。ここでは、時代ごとに明らかになった成果と課題をまとめてみたい。

#### 平安時代

第一部では、常陸平氏の武士団の庶氏が、各河川の流域ごとに鱗のように展開したこと、その開墾地の谷奥には、館、堂宇・経塚などの宗教施設が造営された可能性があることを提示した。白水阿弥陀堂については、徳尼伝説が江戸時代に形成されたこと、戦国期の岩城氏系図をもとに潤色されていることなどを明らかにした。一方、白水阿弥陀堂苑池出土のかわらけ編年から白水阿弥陀堂の創建が伝説の一・一六〇年より遡る可能性(一二世紀前葉)を指摘し、創建に関わったのが岩城氏ではなく岩崎氏(北郷氏)である可能性を指摘した。岩崎氏は、岩手県平泉町の柳之御所遺跡

出土の墨書折敷の書かれた「人々給絹日記」に記載のある「岩崎三郎」の属する武士団であり、徳尼伝説とはまた違った視角で、平泉藤原氏といわきの関係を考えてゆく必要があるだろう。

#### 鎌倉・室町時代

第II部では、好島荘総鎮守である飯野八幡宮の経所建物の構造や間取りなどの復元から、福島県内の発掘調査で確認できる中世の掘立柱建物跡との共通性を指摘した。復元した建物はこの時代の住宅系建物の基準となると考える。「国魂経隆遺領配分状」は多くの研究者によって「田島在家」分析の基本資料として利用されてきたものである。ここでは名字に注目し、作人の構成が国魂氏及び親族、村の有力者、庶子、家の子を包括するものであることを明らかにした。また、譲状の背後には母系を含めた姻族の存在が隠されており、相続も土着も、父系の検討だけでは不十分なことを指摘した。さらに「王」姓型字の存在から大國魂神社を奉祭する古代一族の末裔の存在にも言及した。「平基秀法師の屋敷」では、基秀の譲状と上神谷条里との対比から、この時代の屋敷の性格や手殖地のあり方を探った。文書の分析に歴史地理学を援用した事例である。「菊田荘滝尻宿」の分析も同様の総合的な分析である。滝尻宿のある泉町に関わる文書・金石文・地誌・考古資料・地籍図などの史資料、城館の縄張調査成果、伝承などを検討したもので、中世の滝尻宿の復元を意図した。この復元の当否は今後の発掘調査等で検証されるべきものであろう。

#### 中世城館

第III部では、八か所の城館について発掘調査や縄張調査の成果を紹介した。いわき地方を統治した岩城氏の本拠である白土城、岩城氏の有力家臣である上遠野氏の上遠野城、相馬氏との境目の城である天神山城、地侍・土豪クラスの城である砂屋戸荒川館・中山館・吹揚館、山間の村の城(匠番柵館・殿田館・屹館)など多様な城館を紹介した。いわき市内には約一六〇か所以上の城館跡が確認されているが、縄張図が作成されている城館は四〇か所程度である。

城館が広大なため、開発に伴う埋蔵文化財の保護行政で苦慮する場面も見受けられる。まずは包蔵地台帳に掲載されている城館の詳細な縄張調査が喫緊の課題であろう。

## 戦国時代

第IV部では、戦国大名岩城氏の領国支配と城館、戦国期城下町についてまとめた。城館の縄張と立地による分類、城下町の二重性(イエ的空間・主従的空間)など、他地域の領域権力との共通性が確認できた。近年の戦国史研究の進展には目を見張るものがあり、これらの研究成果を踏まえ、岩城氏の「家中」「洞」と外様の旗下の武士との関係、城館の階層性など今後深められるべき課題は多い。岩城氏の領国支配を解明するためには家臣団の分析は不可欠である。その事例として、岩崎氏(小川氏)、中山氏など岩崎氏系の武士の系図と文書からその系譜を検討し、岩崎氏系でありながら岩城氏の一門扱いになる一族の具体的な動向を提示した。系図類は中世史料を踏まえた批判的検討が必須ではあるが、岩城氏と家臣団の関係性を知る手掛かりとしてもつと活用されてよい。他氏についても同様な検討が必要であろう。

## 2 地域史の可能性

最後に、地域史研究の可能性について思いつくままにふれてまとめたい。

中世前期の武士団は、地域の開発主体としての側面が強調されがちであるが、「国魂経隆遺領配分状」にみられるように、親族・姻族・村の有力者などの複雑な利害関係が内在しているのであり、定田・免田・荒地などが錯綜する非一元的な土地支配であった。文書だけでなく近年調査が進む経塚・金石文・仏像・石造物・考古資料などを活用し

た総合的研究により、武士団の内実や村の実態が明らかになってゆくであろう。

中世後期の武士は支配者(領主)としての側面が研究対象になりがちである。階層的視角からそれを相対化する意味でも、村々に存在する城館の縄張が地域の実情を知る上で有効であると考えられる。本書で紹介した差塩地区の小規模城館や小さいながら石積遺構をもつ吹揚館などはこの一例である。また、岩城氏と家臣団との関係を知る手掛かりとして有効な系図研究は、基礎的な作業としての史料批判も緒についたばかりである。新たな研究の出現に期待したい。

歴史地理学的研究も視野を広げる上で重要である。本書では、中世前期の武士団の開発拠点の景観、鎌倉時代の領主館(平基秀法師の屋敷)の景観、滝尻宿の景観(館・宿・市)、戦国期城下町の景観(大館城)を事例として取り上げた。城館の縄張や条里制遺構もそれ自体はピンポイントで年代を限定できない。考古学的な手法との組み合わせが不可欠である。本書の成果は、今後の研究のたき台として批判的に検討していただきたい。

ジェンダーの視点も地域史の新しい論点を導き出す可能性がある。本書では、徳尼伝説と戦国時代の女性有徳人との関係、国魂氏の姻族の重要性、岩城氏と中山氏の一体化ともいえる姻戚関係を生むに至る白土隆忠の母・姉・娘の役割、岩城郡主としての桂樹院(岩城親隆室)の存在感などに言及してきた。歴史の後景に霞みがちな女性の姿を浮かび上がらせることは、地域史の可能性を開くことになるに違いない。